小規模公共事業に伴う調査

日焼遺跡 2

筑紫野市文化財調査報告書

第89集

日 焼 遺 跡 2

例　　言

１．本書は、道路改良に伴い筑紫野市教育委員会が発掘した「日焼（ひやけ）遺跡２」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

２．調査対象地は筑紫野市大字天山地内にあり、渡邊和子（当時社会教育課 文化財担当 技師）が、調査を行った。

３．平成元年度に筑紫野市教育委員会が実施した発掘調査を第１次調査とし、今回の調査を第２次調査として報告した。

４．調査に係る実側図作成及び写真撮影は、渡邊が行った。

５．報告書掲載の挿図の製図は、(有)文化財テクノアシストに委託した。

６．挿図中に使用した方位および座標値は、すべて国土調査法第Ⅱ座標系で表示した。

７．本書の執筆・編集は、渡邊が行った。

目　　次

本文

頁

1．はじめに …… 3
2．位置と環境 …… 3
3．調査の内容 …… 5
　①SI-1 …… 6
　出土遺物 …… 6～13
　②その他の遺構および出土遺物 …… 13
4．おわりに …… 13

Fig（挿図）

頁

Fig.1　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）　1
Fig.2　周辺地形図（S=1/2,500）　2
Fig.3　日焼遺跡３との位置関係図（S=1/500）　4
Fig.4　調査地点全図および遺構配置図（S=1/40・1/200）折込
Fig.5　調査区内土層実測図-1（S=1/40）　6
Fig.6　調査区内土層実測図-2（S=1/40）　9
Fig.7　SI-1実測図（S=1/30）　10
Fig.8　SI-1出土遺物実測図-1（S=1/4）　12
Fig.9　SI-1出土遺物実測図-2（S=1/4）　13

PL.（写真図版）

PL.1　調査区全景　5
PL.2　土層　7
PL.3　土層　8
PL.4　SI-1　11
PL.5　SI-1出土遺物　14

表－１　出土遺物一覧表　15

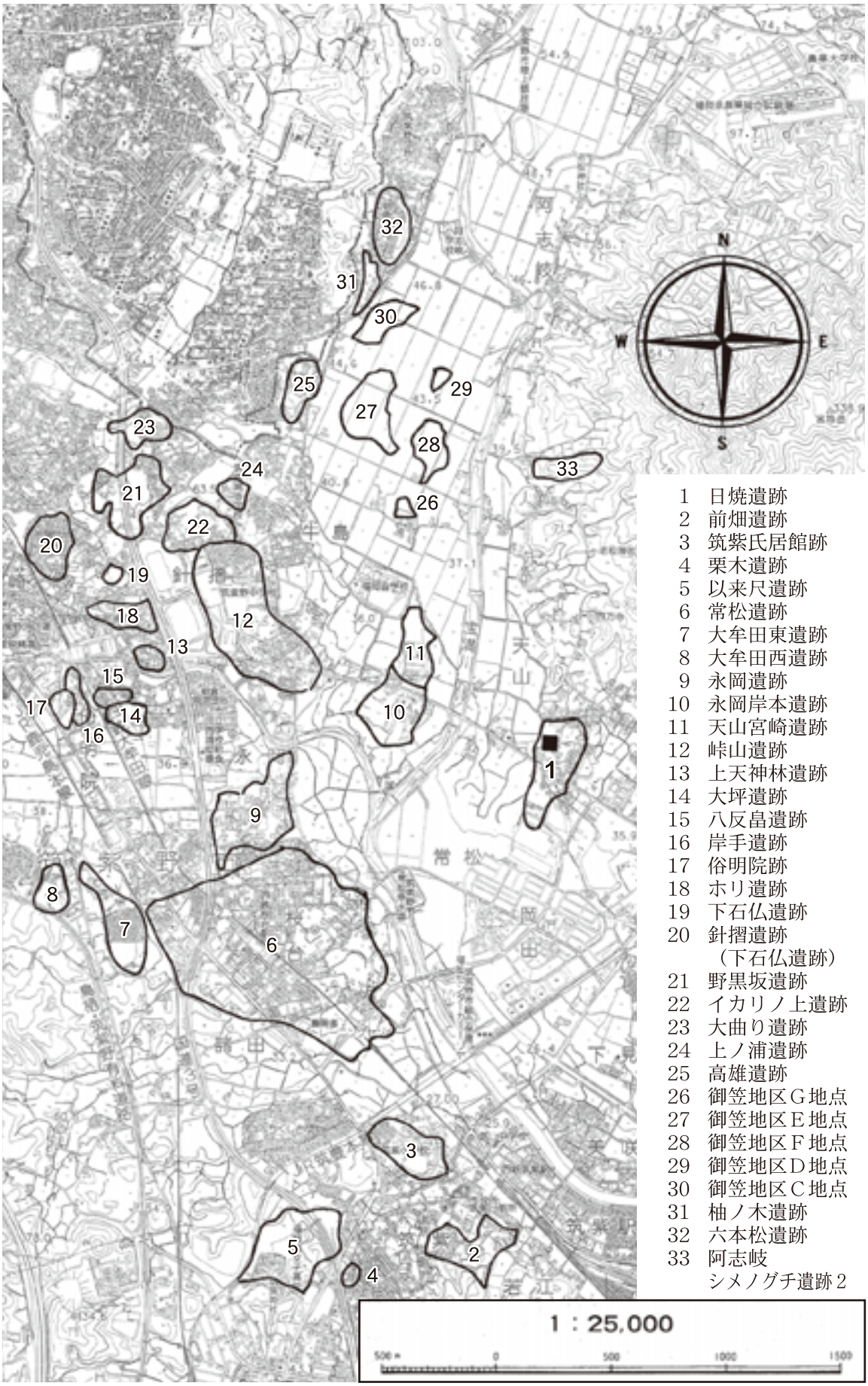


Fig.1　周辺遺跡分布図（S＝1/25,000）

Fig.2　周辺地形図（S＝1/2,500）

1．はじめに

市教育委員会・文化財担当では、平成８年度より上下水道工事および道路建設等の小規模な公共事業に伴う先行調査や工事立会などの着手を始めた。しかし着手当初は、文化財担当と担当部局間での周知徹底が進まず、先行調査や本調査の着手までには至らなかった。

これ以後、担当部局との協議を重ね周知徹底を図り、次年の平成９年度は工事に先行した本調査を実施する協議を行った。その本調査[註1]は天山工区の上水道工事に伴うものであった。

平成10年度には、本調査対象地はなく上下水道工事に伴う立会だけであった。これらについては極力土層図を作成し、遺跡の基礎資料作りに努めた。

平成11年度は、平成１０年度と同様に工事立会の10箇所だけが対象で、前年度のように土層図作成を実施した。

今回の調査は、平成１２年度の建設課における道路改良工事に伴うものである。対象地は、平成９年度の上水道工事に伴う立会調査の結果から遺構の遺存状況が良好であると推定されたため、建設課との打ち合わせにおいて本調査実施の協議を行った。その後、工事着手時に施工業者と工程を詳細に打ち合わせし、本調査を実施した。

2．位置と環境

筑紫野市は福岡県の南西部に位置し、東は嘉穂郡筑穂町（現飯塚市）、朝倉郡夜須町（現筑前町）と、西は筑紫郡那珂川町、南は小郡市・佐賀県、北は大野城市・太宰府市とに接する。

周辺地形を概観すると南西部の背振山地、北西部の三郡山地地帯とに挟まれた狭長な平野部からなり、筑紫平野と福岡平野の接点にあたり、古代から現代まで交通の要衝として重要な位置を占めている所でもある。三郡山系の一つ宝満山からは多くの小河川が流下し、流下した南麓の河川は宝満川から、さらに筑後川に合流して有明海へと注いでいる。この宝満川の両岸には肥沃な沖積平野が形成され、数多くの遺跡の所在することでも知られている。

日焼遺跡は筑紫野市大字天山・岡田を含んだ範囲になる。ここは筑紫野市中心市街地より東約3.8㎞に位置し、筑前町（旧夜須町）との境近くにあって、三郡山系より連なる宮地岳（標高338,9m）の南山麓部にあたる。この宮地岳は宝満川の中流域の北側に位置し、北西・南東山麓には多くの古墳が群集し各々の古墳群を形成している。また平成１１年には古代山城跡の発見もあり、注目されている。調査地点の北側0.7㎞には中世山城である「柴田城」が所在し、その前面の宮地岳南山麓を江戸時代の日田街道も通過する。また日焼遺跡の南東には、上限を８世紀代に下限を１０世紀代とする時期の官道が検出された岡田地区遺跡群[註2]も所在している。遺跡内においては、昭和６１年に岡田地区遺跡群に隣接した地区で第１次調査が実施され、弥生時代後期後葉から古墳時代前期までの集落跡が確認されている。

今回の調査地点は、筑紫野市天山に所在する。ここは日焼遺跡の北端にあり、周辺では、今日まで本調査の実施された事例はなかった。

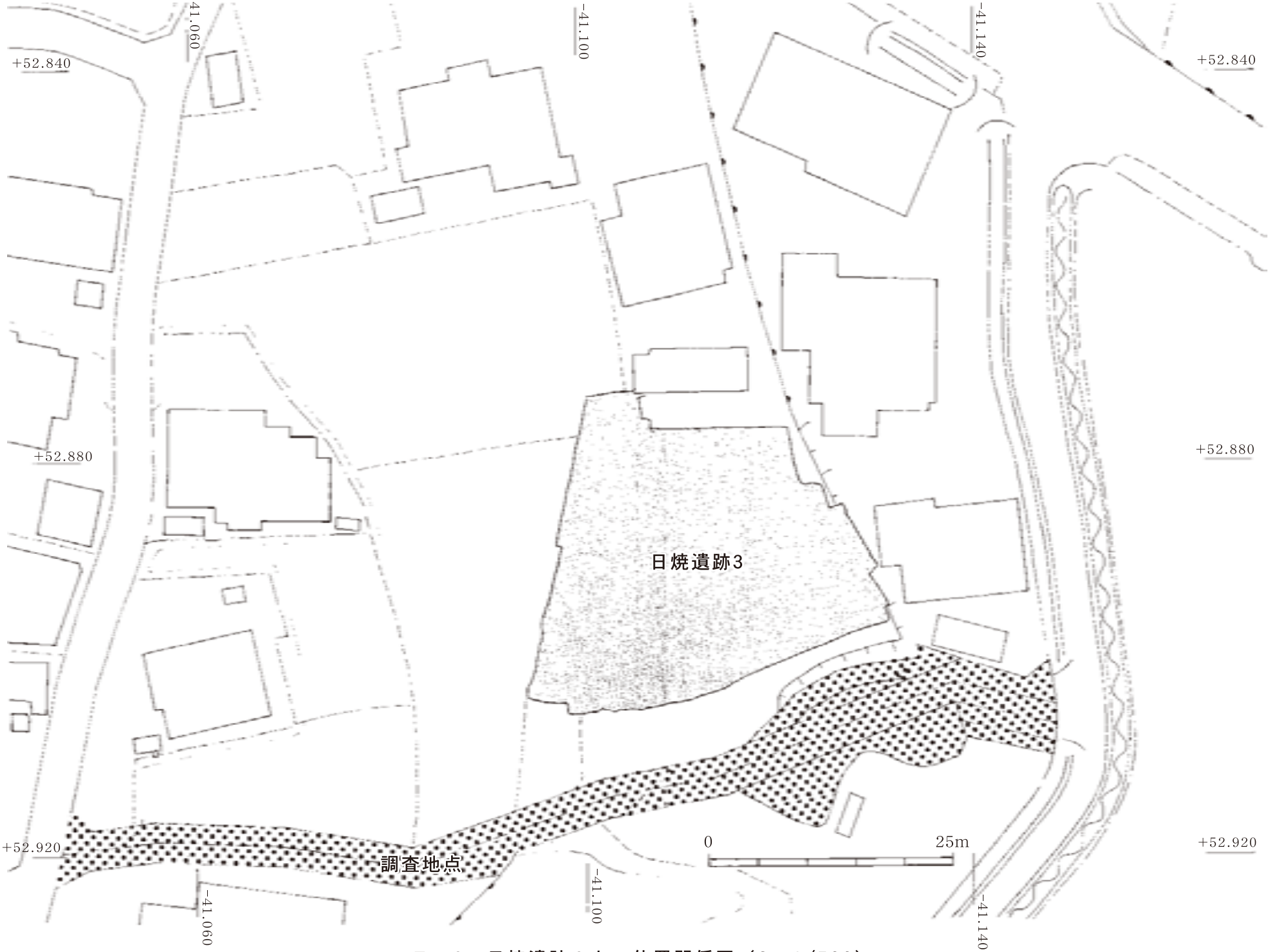


Fig.3　日焼遺跡３との位置関係図（S＝1/500）

PL.1　調査区全景

３．調査の内容

今回の調査地点は、日焼遺跡では北端にあって宝満川を西側に望み、周辺の地形は宮地岳から延びた丘陵縁辺部で宝満川によって侵食された崖面上にあたる。この縁辺部を横断する様に掘られた農道の全長45.90mが調査地である。ここでは南北側に残る旧地形との比高差は0.3～1mを測る。また場所によっては著しく削平されて、遺構の遺存状況は悪いと思われた。

平成８年度の立会調査で確認した周辺の基本層序は、道路路床の下に火山灰質の黒色粘質土(本来の土色とは差異があるが、平成８年度分調査の土層図土色に遵守した。)が堆積し、その下が八女粘土層となる。また黒色粘質土層から遺構が切り込まれている場所もある。

土層図については、南側は撹乱や著しく削平されているため全て北側を基準として作成した。M23～M24区間(Fig.5)の層序は、最上層は耕作土で30㎝前後の厚みがあり、遺物がかなり混じる。その下部には遺構検出面となる黒色粘質土が10～20㎝堆積している。ここでも層に遺構らしい落ち込みが確認できる。しかしM24から西に２mのラインは排水管埋置工事で撹乱されている。この撹乱よりM23方向に遺構らしいプランが確認でき調査対象としたが、地山の窪みや遺構床面の残りで明確なプランにはならなかった。この区間の農道下端の掘削は、八女粘土層までおよんでいない。NO.18～NO.19区間(Fig.6)の層序は、最上層に表土20～45㎝、次に淡黒色粘質土が10～20㎝の厚みで堆積し、その下部に黒色粘質土層が20～30㎝の厚みで推積し、遺物も多量に混じる。下層は八女粘土層となっている。土層では黒色粘質土から切り込んだ遺構が確認でき、ここからは多量の遺物が出土した。この区間の農道下端は、著しく削平されて八女粘土層まで及んでいるため遺構は検出できず、遺物も全く出土していない。

SI－１やPitの検出されたM24～M25区間の層序は、他と比較して耕作土は60～80㎝と厚く、し

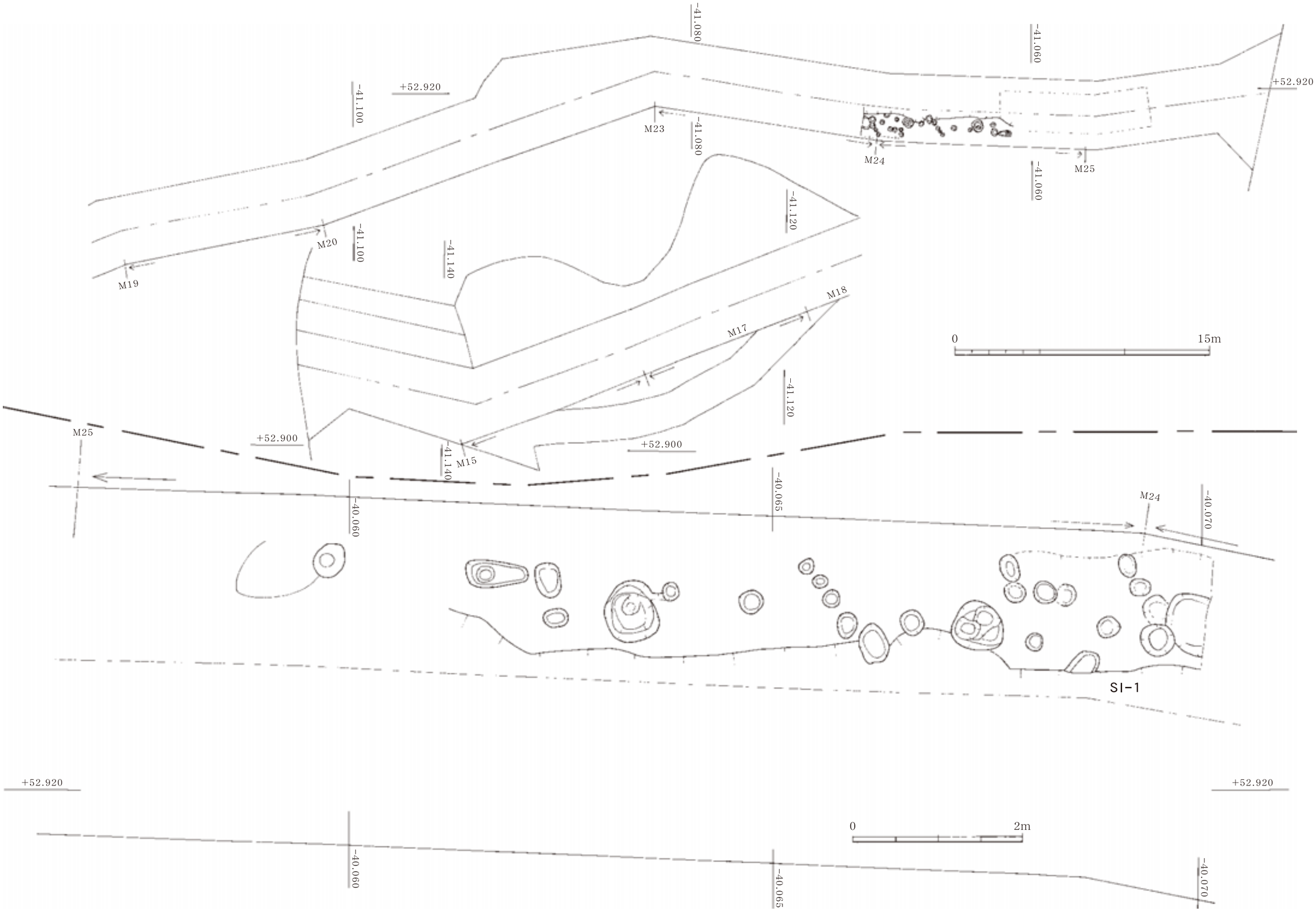


Fig.4　調査地点全図および遺構配置図（S＝1/40・1/200）

かも遺物細片が多く混じっている。 直下には遺構検出面である黒色粘質土層が10～20㎝の厚みで残る。しかし黒色粘質土層は、削平がかなり下まで及んで耕作土に代わった可能性は考えられる。この区間の農道下端は下部の八女粘土層には到達せず、黒色粘質土層の上面が道路面となる。以上の土層から南側に遺跡が拡がる事は確実となった。

①SI-1(Fig.7) 予定路線内の東側M24～M25区間で検出された。住居跡の埋土は茶褐色粘質土である。検出面は耕作土直下で、遺構は八女粘土層まで掘り込まれている。遺構の主体は南側にあって、残存するSI－１の長さは2.7m、幅1.5mとなる。N24の西90㎝からは排水管埋置により撹乱され西側壁部分の詳細は不明である。このため全体のプランや規模は確認できない。N24より東1.7mに側壁がかろうじて確認できるが、Pitに切られ長さ60㎝しか残っていない。壁の深さも6㎝程度で残りは良くない。北側も素掘り水路のために段落ちがあり、北側壁の詳細は確認できない。残存する床面には11個のPitが検出されたが、どれも非常に浅く、この住居跡に伴うものとは考えられない。床面はN24ライン付近に踏みしめによる汚れが確認できた。出土遺物は全体的に細片が多いが、南側未調査区境付近の床面から遺物(Fig.8・9)が出土した。

出土遺物(Fig. 7・8)

１は中期後葉の丹塗り高杯の杯部片で、色調は外面浅黄橙色(10YR8/4)(10YR8/3)、内面はにぶい黄橙色(10YR7/4)浅黄橙色(10YR8/4)を呈す。胎土に細砂粒を含むが、焼成は良好。外面の調整は磨耗のため不明、内面にはミガキ調整を施し、復元口径25.4㎝を測る。２は復元口径32.2㎝、中期後葉の開口壺口縁部で頸部は短く、やや直に立ち上がり口縁端部は大きく外反し、残存高は9.55㎝を測る。内外面ともに浅黄橙色(10YR8/3)の色調をなし、胎土には少量の細砂粒と砂粒を含み、焼成は普通である。３は後期初葉の甕で復元口径16.95㎝、器高23.1㎝を測り底部が一部欠損している。焼成は普通で、胎土に0.5～2㎜の砂粒を含む。外面は灰白色(10YR7/2),内面浅黄橙色(10YR8/3)(10YR8/4)の色調を呈す。

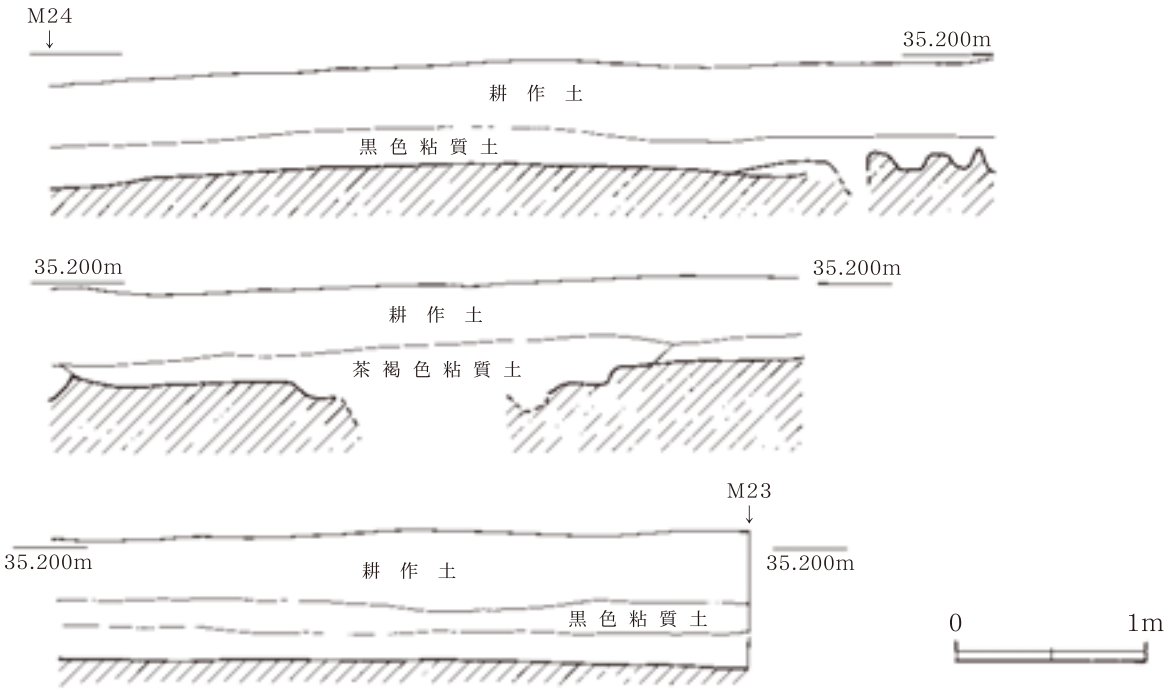


Fig.5 調査区内土層実測図－1（S＝1/40）

PL.2　土層

PL.3　土層

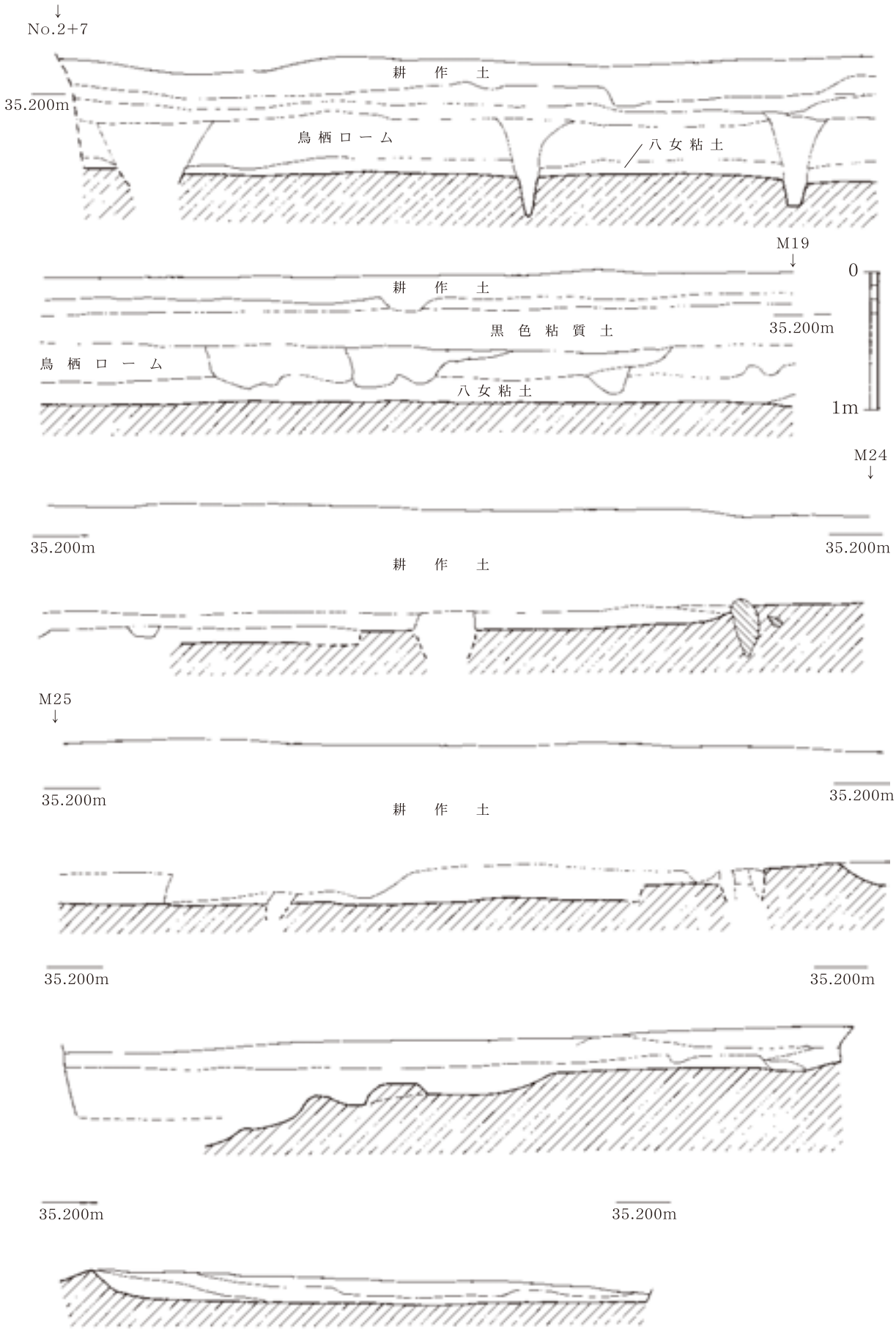


Fig.6　調査区内土層実測図－2（S＝1/40）

調整は内面胴部にナデ、内面胴部下位から底部には工具痕が残り、外面胴部にはハケ目が施される。4は復元口径25.8㎝、残存高22.8㎝を測る中期末の甕で、外面橙色(5YR6/6)(5YR6/8)、内面橙色(5YR6/8)の色調を呈す。胎土に細砂粒と1.5㎜大の砂粒と赤褐色粒を含むが焼成は良好である。外面胴部にはハケ目調整が施されて、内面の胴部には指頭痕が残る。5の甕も中期末のもので、復元口径26.8㎝、残存高24.6㎝。内外ともに浅黄橙色(10YR8/3)の色調をなす。焼成は良好だが、胎土に0.5～1.5㎜の砂粒と赤褐色粒を少量含んでいる。外面の調整にはハケ目、内面の胴部はハケ目後ナデを施す。6の甕口縁片は中期末の所産で、残存高は5.0㎝を測る。色調は、外面浅黄橙色(7.5YR8/4)(10YR8/4)、内面浅黄橙色(7.5YR8/4)(10YR8/3)を呈す。胎土には細砂粒と砂粒を含み焼成は良好。外面はハケ目調整後ナデ、内面にはナデ調整がなされる。7は中期後葉の甕の底部である。底径8.9㎝、残存高6.3㎝で、調整は内外面ともに磨耗のため不明。胎土には0.5～2㎜の砂粒を多量に含み、焼成は普通である。8の甕の口縁は中期後葉の所産で、残存高18.3㎝を測る。内外ともに灰白色(10YR8/2)の色調を呈す。胎土には細砂粒を含んで、焼成は良好。内面胴部はナデ、外面胴部はハケ目後ナデの調整が施される。復元口径38㎝、残存高18.3㎝の9は中期後葉のもの。内面は、にぶい黄橙色(10YR7/2)(10YR7/3)、外面にぶい黄橙色(10YR7/2)の色調をなす。胎土には細砂粒と2㎜大の砂粒を含み、良好な焼成である。調整は外面胴部にハケ目後ナデを内面胴部にはナデを施している。10は中期末から後期初葉への過渡期の中型の甕の口縁部片で内側への突出が強く、頸部直下に退化した断面三角形の凸帯が一条巡る。復元口径は46.5㎝、残存高12.9㎝で、色調は内外面ともに浅黄橙色(7.5YR8/4)をなし、胎土には0.5～３㎜大の砂粒と赤褐色粒を少量含

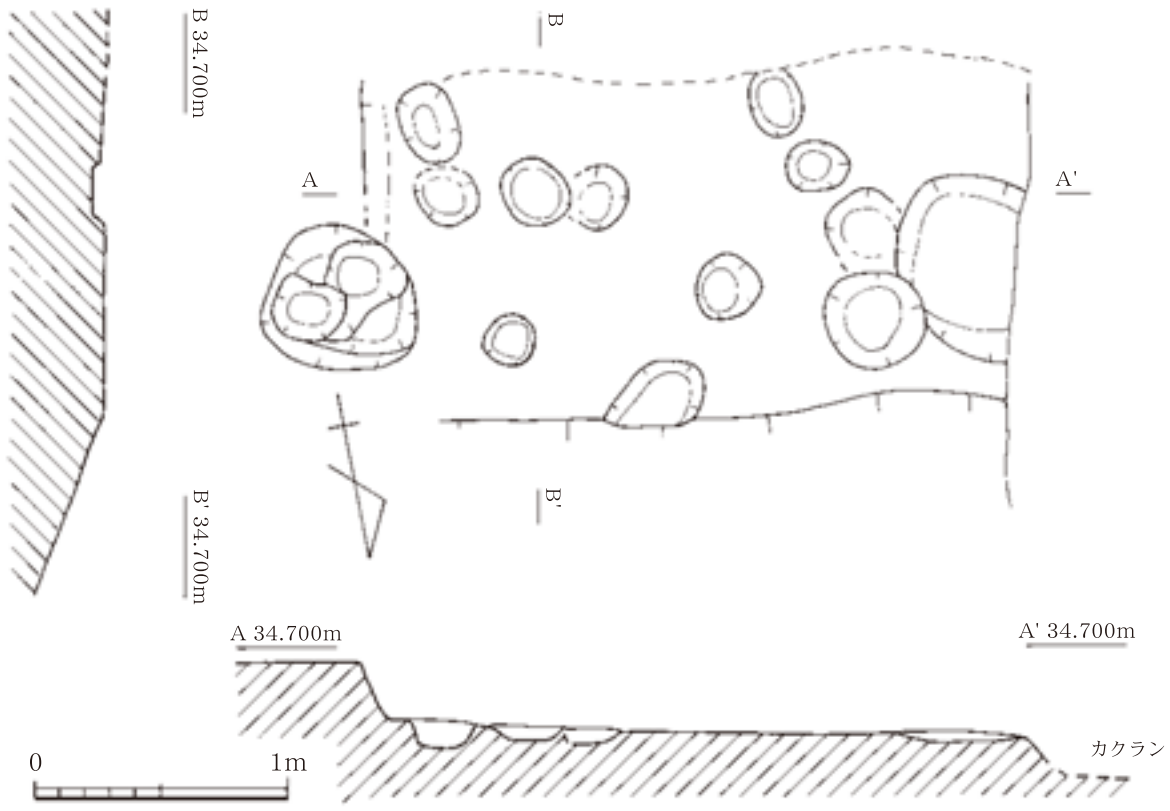


Fig.7　SI－1実測図（S＝1/30）

PL.4　SI－1

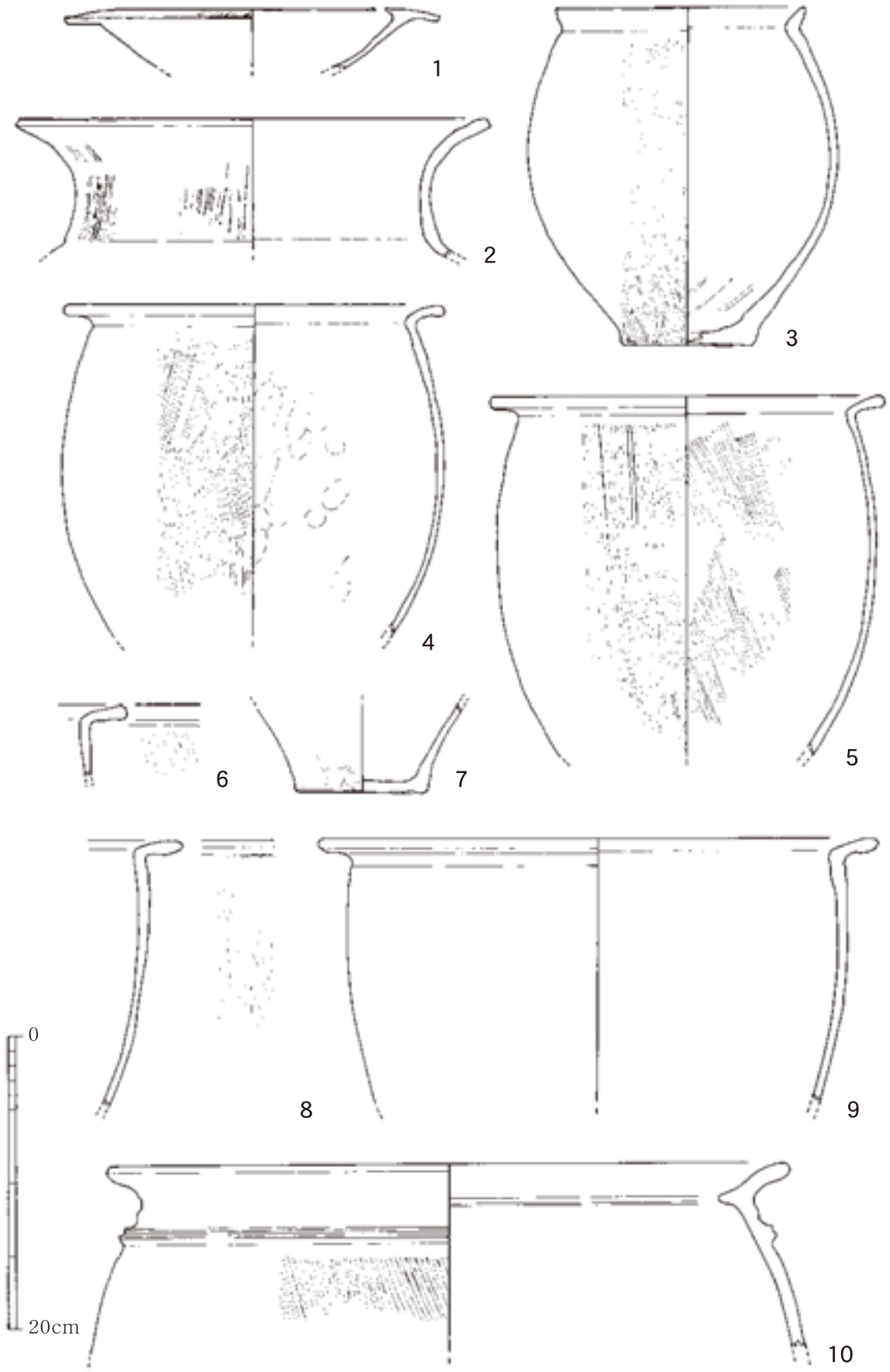


Fig.8　SI－1出土遺物実測図－1（S＝1/4）

むが、焼成は良好。外面胴部上位はハケ目調整後ナデ、中位はハケ目調整、内面胴部上位はナデ調整を施している。11の器台は受部径13.9㎝、裾部径16㎝、器高17.5㎝を測る。外面の色調は灰白色(10YR8/2)・浅黄橙色(10YR8/2)で、内面の色調は浅黄橙(10YR8/3)を呈す。焼成は良好で、胎土に細砂粒と１㎜大の砂粒を含んでいる。内外面の受部と裾部にはハケ目後ナデ調整が、内面体部には指頭痕が顕著に残る。外面体部にはハケ目調整が施される。12は受部径13.5㎝、裾部径15.5㎝で器高17.3㎝の器台で、色調は内外面ともに灰白色(10YR8/2)・浅黄橙色(10YR8/3)を呈す。細砂粒と１㎜大の砂粒を含み、焼成は良好である。調整は内外面の受部と裾部にハケ目後ナデ、内面体部には指頭痕が残り、外面体部にはハケ目がなされる。11・12のいずれもくびれが体部の上位にあって中期後葉のものである。

②その他の遺構および出土遺物　調査区全域は、削平されているため遺構の遺存状況は悪い。その他の遺構はPitだけが12個検出された。それらはSI－１の東側に集中して検出された。検出されたPitも浅いものが多く、大きさもばらついている。これらには規則性はなく掘立柱建物跡としてまとまるものはなかった。出土遺物も細片が多く図示できるものはない。また図示できなかったが、路線NO.18～19区間の南側境界周辺から出土した遺物についての写真と計測値だけを掲載した。

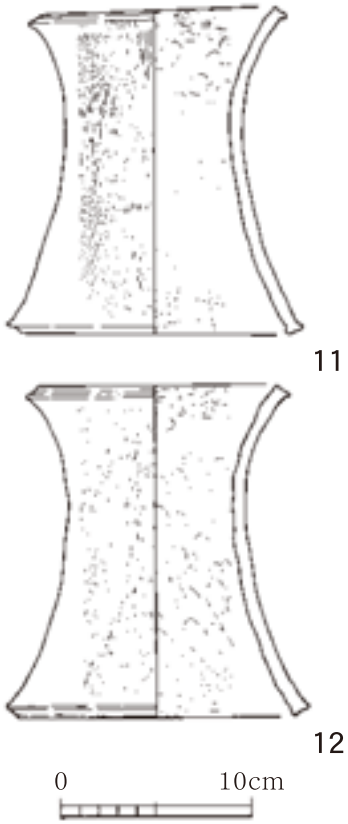


Fig.9　SI-1出土遺物実測図-2 (S=1/4)

４．おわりに

今回の調査区は、道路改良工事に伴うもので、面積も狭く遺跡の全容は十分に把握できないが、第１次調査で確認された弥生時代後期後葉から古墳時代前期の時期のものは出土しなかった。第１次調査時の日焼遺跡は、今より狭く国道386号線より南側だけで、その後の数度の確認調査結果から現在の範囲になり、日焼遺跡全体が、第１次調査で示された時期の集落であると推定されていた。

しかし今回の調査では弥生時代中期後葉から後期初葉の時期の遺物が出土した事から、さらに時期は遡る事が確認できた。第１次調査や近くにある鞭掛遺跡や岡田地区遺跡群からは、弥生時代中期以前の遺構は殆ど検出されていない。推測の域はでないが、この事は宮地岳山麓に近い範囲に弥生時代中期以前の集落の中心があって、弥生時代後期後葉以降に集落の中心は南側（鞭掛遺跡[註4]や岡田地区遺跡群[註4]）に移った可能性が考えられる。

註１．峰古野１号墳　　２０００年　筑紫野市教育委員会

註２．日焼遺跡　　１９９３年　筑紫野市教育委員会

註３．鞭掛遺跡　　１９９４年　筑紫野市教育委員会

註４．岡田地区遺跡群　　１９９８年　筑紫野市教育委員会

Fig.8-1

Fig.8-3

Fig.8-4

Fig.8-5

Fig.8-2

Fig.8-6

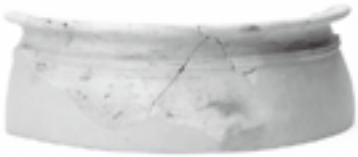


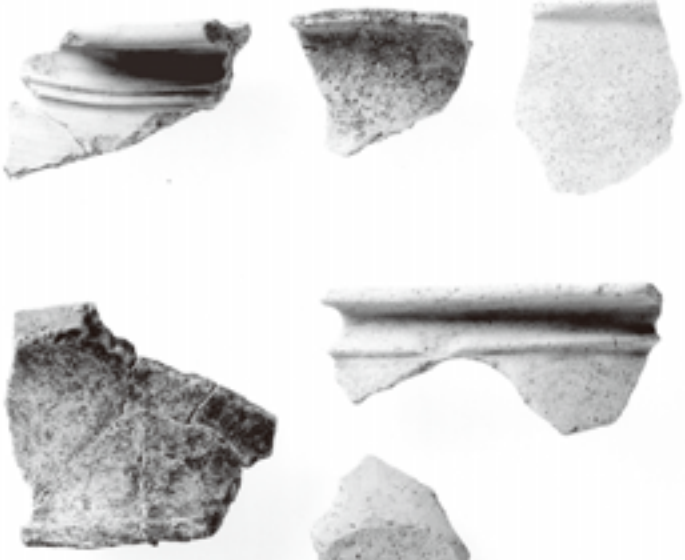
Fig.8-10

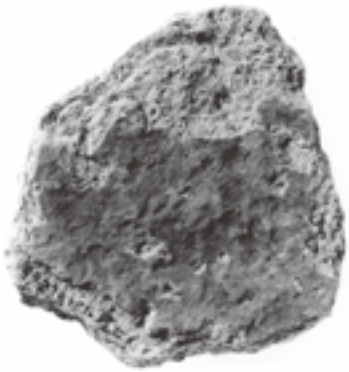
Fig.8-8

Fig.8-9

Fig.9-12

Fig.9-11





PL.5　SI-1出土遺物

表－1　出土遺物一覧表

法量の(　)は推定値・復元値を示す

Ｆｉｇ番号	器　種	法　量			手　法　の　特　長	備　　考　A.色調　B.胎土　C.焼成　D.残存状況　E.その他
		口 径	底 径	器 高		
Fig　8-1	高坏(坏部) (弥生土器)	(25.4)		4.1	内面ミガキ 体部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 外面摩耗により調整不明	Ａ．外面浅黄橙色（10YR8/4）（10YR8/3）、 内面にぶい黄橙色（10YR7/4）・浅黄橙色（10YR8/4） Ｂ．細砂粒～1mm大の砂粒を含む　Ｃ．良好 Ｄ．口縁部～体部上位1/4　　Ｅ．内外面に赤彩
Fig　8-2	壺 (弥生土器)	(32.2)		9.55	内外面ともに暗文	Ａ．内外面ともに浅黄橙色（10YR8/3） Ｂ．細砂粒～1.5㎜大の砂粒を含む Ｃ．普通 Ｄ．口縁部～頸部1/4　　Ｅ．内外面に赤彩
Fig　8-3	甕 (弥生土器)	(16.95)	8.8	23.1	内面胴部ﾅﾃﾞ 内面胴部下位～底部に工具痕 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 外面胴部ﾊｹ目	Ａ．A.外面灰白色(10YR8/2)、 内面浅黄橙色（10YR8/3）（10YR8/4） Ｂ．0.5～2mm大の砂粒を含む　　Ｃ．普通 Ｄ．全体の2/5　　Ｅ．外面胴部中位～下位にスス付着
Fig　8-4	甕 (弥生土器)	(25.8)		22.8	内面胴部　指頭痕 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 外面胴部上位～下位ﾊｹ目	Ａ．外面橙色（5YR6/6）（5YR6/8）、内面橙色（5YR6/8） Ｂ．細砂粒～1.5mm大の砂粒・赤褐色粒を含む Ｃ．良好 Ｄ．口縁部～胴部1/3　　Ｅ．外面にスス付着
Fig　8-5	甕 (弥生土器)	(26.8)		24.6	内面胴部ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ 口縁部ヨコナデ 外面胴部ﾊｹ目	Ａ．内外面ともに浅黄橙色（10YR8/3） Ｂ．0.5～1.5mm大の砂粒・赤褐色粒を少量含む Ｃ．良好 Ｄ．口縁部から胴部1/4
Fig　8-6	甕 (弥生土器)			5.0	内面ﾅﾃﾞ 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 外面胴部上位ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	Ａ．外面浅黄橙色（7.5YR8/4）（10YR8/4）、 内面浅黄橙色（7.5YR8/4）(10YR8/3) Ｂ．細砂粒～1.5㎜大の砂粒を含む Ｃ．良好　　Ｄ．口縁部1/6
Fig　8-7	甕 (弥生土器)		8.9	6.3	内外面ともに摩耗により調整不明 外底面ﾅﾃﾞ	Ａ．外面灰白色（10YR8/2）（2.5Y8/2）・にぶい黄橙色(10YR7/3)、 内面灰白色（10YR8/2）・浅黄橙色（10YR8/3） Ｂ．0.5～2mm大の砂粒を多量に含む Ｃ．普通　　Ｄ．底部の3/4
Fig　8-8	甕 (弥生土器)			18.3	内面胴部上位ﾅﾃﾞ 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 外面胴部上位ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部中位ﾊｹ目後ﾅﾃﾞ	Ａ．内外面ともに灰白色(10YR8/2) Ｂ．細砂粒～1mm大の砂粒を含む Ｃ．良好 Ｄ．口縁部～胴部上位1/5
Fig　8-9	甕 (弥生土器)	(38.0)		18.3	内面体部上位　ﾅﾃﾞ 口縁部　ﾖｺﾅﾃﾞ 外面体部　ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ	Ａ．外面　にぶい黄橙色（１０YR7/2） 内面　にぶい黄橙色(10YR7/2)（10YR7/3） Ｂ．細砂粒～2mm大の砂粒を含む Ｃ．良好　　Ｄ．口縁部～体部上位1/4
Fig　8-10	甕 (弥生土器)	(46.5)		12.9	内面胴部上位ﾅﾃﾞ 口縁部ﾖｺﾅﾃﾞ 外面胴部上位ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 胴部中位ﾊｹ目	Ａ．内外面ともに浅黄橙色（7.5YR8/4） Ｂ．0.5～3mm台の砂粒を含む。赤褐色粒を少量含む Ｃ．良好　　Ｄ．口縁部～胴部上位2/5 Ｅ．内面口縁部スス付着、外面胴部中位黒斑
Fig　8-11	器台 (弥生土器)	(受部) 13.9	(裾部) 16.0	17.5	内面体部指頭痕、内面受部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 内面裾部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ、外面体部ﾊｹ目 外面受部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 外面裾部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ	Ａ．外面灰白色(10YR8/2)・浅黄橙色（10YR8/4）、 内面浅黄橙色（10YR8/3） Ｂ．細砂粒～1㎜大の砂粒を含む Ｃ．良好　　Ｄ．ほぼ完形
Fig　8-12	器台 (弥生土器)	(受部) 13.5	(裾部) 15.5	17.3	内面体部指頭痕、内面受部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 内面裾部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ 外面体部ﾊｹ目 外面裾部ﾊｹ目後ﾖｺﾅﾃﾞ	Ａ．外面灰白色(10YR8/2)・浅黄橙色（10YR8/3）、 内面灰白色（10YR8/2）・浅黄橙色（10YR8/3） Ｂ．細砂粒～1㎜大の砂粒を含む Ｃ．良好　　Ｄ．裾部1/4欠損
	甕 (弥生土器)			11.0	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．内外面ともに浅黄橙色（10ＹＲ8/3） Ｂ．2～3㎜大の石英粒を少量含む Ｃ．普通 Ｄ．口縁部1/12
	甕 (弥生土器)			4.8	内外面ともに摩耗により調整不明 口縁部外面に工具痕	Ａ．内外面ともに灰白色（10ＹＲ8/2） Ｂ．細砂粒を少量含む　　黒色粒を含む Ｃ．普通 Ｄ．口縁部付近1/12
	甕 (弥生土器)			3.5	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．外面灰白色（10YR8/2）、内面にぶい黄橙色（10YR7/2） Ｂ．1㎜大の石英･赤褐色粒を少量含む Ｃ．普通 Ｄ．口縁部付近1/2
	壺 (弥生土器)			13.0	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．内外面ともに浅黄橙色（10YR8/3） Ｂ．細砂粒を多量に含む。 Ｃ．不良 Ｄ．口縁部～頸部1/16
	甕 (弥生土器)			18.0	内面口縁部に指頭痕 内面胴部上位ﾅﾃﾞ 外面ﾖｺﾅﾃﾞ後ﾊｹ目	Ａ．外面にぶい橙色（7.5YR7/4）、内面にぶい橙色(7.5YR6/4) Ｂ．1㎜大の石英・長石を少量含む　ウンモを含む Ｃ．良好 Ｄ．口縁部付近のみ　　Ｅ．二条の突帯あり
	甕 (弥生土器)			5.8	内外面ともにﾅﾃﾞ	Ａ．内外面ともににぶい橙色（7.5ＹＲ7/4） Ｂ．石英を少量含む Ｃ．良好 Ｄ．口縁部付近1/16　　Ｅ．一条の突帯あり
	壺 (弥生土器)			6.1	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．内外面ともに浅黄橙色（10ＹＲ8/4） Ｂ．細砂粒を少量含む Ｃ．良好 Ｄ．口縁部付近のみ
	甕 (弥生土器)			7.6	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．外面浅黄橙色（10ＹＲ8/4）、内面にぶい黄橙色（10ＹＲ7/4） Ｂ．細砂粒を少量含む Ｃ．普通 Ｄ．口縁部付近1/16　　Ｅ．一条の突帯あり
	壺 (弥生土器)		(4.5)	3.5	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．内外面ともににぶい橙色（7.5ＹＲ7/4）・ 一部黒褐色（10ＹＲ3/1）、内面にぶい橙色（7.5ＹＲ7/4） Ｂ．細砂粒を少量含む　　Ｃ．普通 Ｄ．底部1/5　　Ｅ．外底面に木の実？圧痕
	甕 (弥生土器)		(4.2)	3.5	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．内外面ともににぶい黄橙色（10ＹＲ7/3） Ｂ．細砂粒を少量含む Ｃ．普通 Ｄ．底部1/5
	甕 (弥生土器)		(.4.6)	3.5	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．内外面ともににぶい浅黄橙色（10ＹＲ7/4） Ｂ．細砂粒を少量含む Ｃ．良好 Ｄ．底部1/4
	甕 (弥生土器)			1.3	内外面ともに摩耗により調整不明	Ａ．外面褐灰色（7.5ＹＲ4/1）、内面橙色（7.5ＹＲ4/1） Ｂ．細砂粒を少量含む Ｃ．良好 Ｄ．底部1/8

報告書抄録

ふりがな	ひやけいせき２
書名	日焼遺跡２
副書名	小規模公共工事に伴う調査
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	第８９集
編集者名	渡　邊　和　子
編集機関	筑紫野市教育委員会（教育部　文化財課　文化財担当）
所在地	〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
発行年月日	西暦２００６年３月３１日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひやけいせき 日焼遺跡	ちくしのし 筑紫野市 おおあざあまやま 大字天山	176	319	33° 00' 00"	131° 00' 00"	2000.2.06 ～2.15	40㎡	道路改良

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日焼	集落	弥生時代	住居跡 柱穴	弥生土器	

日焼遺跡２

筑紫野市文化財調査報告書

第８９集

平成１８年３月３１日

発　行　筑紫野市教育委員会
〒818-8686　福岡県筑紫野市二日市西1-1-1
TEL 092-923-1111㈹
FAX 092-923-9644

印　刷　株式会社ジェイ・ピー
〒818-0047　福岡県筑紫野市古賀６－５
TEL 092-929-5370
FAX 092-929-5371